

音楽と私



Vol.03
September, 2025

大木 いずみ 埼玉県立大学 / JACR 理事



私

が子供のころは、ピアノ教室やスイミングスクールに通うという「習い事」が流行っていました。両親は文化的な生活に憧れて、私の熱心な頼みをきいてくれました。私は団地の畳の部屋にアップライトのピアノを無理やり設置してもらい、近所のピアノ教室に通い始めました。

子供ながらに友達がやっているピアノを自分もやりたいし、褒められたらそれなりにうれしく、もっと上手になりたいと思うようになりました。一方、体力づくりに通わされた水泳は、「やる気があるのか」とコーチに叱られてばかりでした。今思うと私の時代は「スパルタ教育」が主流でした。

父の仕事の関係で小学校3年生からアメリカのミネソタ州（田舎町）に住むことになりました。当時のその地域には日本語学校もなく、現地の小学校の日本人（日本語が通じる）は、私と妹の2人だけでした。そのような環境で、父にピアノが欲しいと言ったところ、子供用サイズのバイオリンを購入してくれ、先生もつけてくれました（後に近所の親切な方が、ピアノを譲ってくれてピアノも習うことができました）。

音楽に言葉はいりません。楽譜は世界共通ですし、合

奏や伴奏はなんとなく伝わるものです。当時の日本の音楽教育とは全く異なり、かなり自由な環境で、「音楽は楽しい」ことを知りました。

帰国して、周りの子供のピアノの技術や勉強の知識量に驚きましたが、その分音楽を楽しめるようになりました。大学で初めて一人暮らしをするときも、バイオリンやピアノを弾くことで気分転換ができたし、共通の趣味からたくさんの人と交流しました。大学ではオーケストラに入り合宿や演奏会を満喫しました。夏休みには全国の医学生が集まってオーケストラを結成し、演奏会をするイベントに参加しました。

社会にでてからは、趣味からは遠のいていましたが、折にふれて音楽を楽しんでいます。写真は、前の職場で患者さん達と音楽会を開催したときのものです。仲間と時間をつくって準備し、本番の最後はみんなと合唱です。

同じ時間を「音楽」という共通のもので、様々な人と楽しめるのは素晴らしいです。性別、年齢、言葉を超えてつながれると思います。

音楽に定年はありません。一生楽しくかかわっていきたいものです。